

地位の真理

この学び全体のアウトラインと本日の内容

1. イントロダクション (総論 七つの項目)
2. 各論 33の事柄
3. 結論

6月から10月までに、イントロダクションと各論の第13「アブラハム契約に近い者とされた」までを学びました。前回は、補足として、第12に関連して「聖霊の賜物」を、また第13に関連して「聖書における契約」を扱いました。

本日は、各論の第14「聖なるそして王なる祭司のメンバーとされた」から第17「天の市民である」までを学びます。

前回までの内容の確認

イントロダクション 総論 七つの項目

1. キーワードは「キリストにあって」「イエスにあって」「イエス・キリストにあって」「キリスト・イエスにあって」「彼にあって」「その方にあって」
2. 信者が持つ地位と実際の生活との関係
 - (1) 信者が持つ地位(メシアの中にあるという地位)と、それにつながる33の事柄は、神の目から信者を見たときの真実である。
 - (2) 信者の実際の生活を人間の目から見ると、そういう地位にあるようには見えない。
 - (3) 信者の人生における歩みを、信者の持つその地位にふさわしいものにしていくこと、これは聖霊の働き「聖化」である。
 - (4) サタンや悪霊との戦いにおいては、信者の実際の生活がどうあるかではなく、メシアの中にある地位とそれに伴う権威によって対抗する必要がある。
3. その地位につくための経路は、聖霊のバプテスマである (I コリ 12 : 13)。
4. その地位が与えられた源は、神の恵みである (エペソ 1 : 6、2 : 7)
5. その地位は、信者の権威の基盤である (エペソ 1 : 18~19)
6. その地位に伴う権威を行使することは、サタンに対する最良の防御である。
7. 「キリストにあって」というキーワードと並んで、メシアと信者との関係を教える重要な表現「キリストと共に」・・・神の目から見たとき、信者はメシアと同一の者と見られている。十字架からスタートして全部で8つの展開【キリストと共に、十字架につけられた・死んだ・葬られた・生かされた・復活させられた・苦しんでいる・栄光を受けるであろう・共同相続人となるであろう】。そのすべてが、救いの結果である。神の恵みであって、人の働きではない。

各論 33の事柄

1. 神によって贖われた者である
2. 神と和解させられた者である
3. 神の怒りはなだめられており、神は私に怒ってはおられない
4. 神から赦しを受けている者である
5. 神から義と認められた者である
6. 神からの栄光を受ける者である
7. 闇の支配から解放された者である
8. 心の割礼（キリストの割礼）を受けた者である
9. 神に受け入れられる者である
10. 聖霊の初穂（初なるの実）をいただいた者である
11. 神の永遠の計画の中にある者である
12. 岩なるメシアを土台として立つ者である
13. アブラハム契約に近い者とされた【異邦人信者にとって】

本日の内容

14. 聖なるそして王なる祭司のメンバーとされた【とくにユダヤ人信者】

(1) 1ペテ2:5~9 「聖なる祭司」(5節)、「王である祭司」(9節)

- ① 王は預言(創49:10)によりユダ族から。祭司はモーセの律法ではレビ族のアロンの家系から。
- ② イエスはユダ族から出た王であるが、同時に祭司である。イエスがモーセの律法を成就し、これを終わらせたので、可能となった。このイエスの地位は、レビ系祭司職とは別に、「メルキゼデクの位に等しい祭司」(ヘブル7:17)と呼ばれる。メルキゼデク(創14:18~20) = 王であり祭司である人物
- ③ 出19:6 「あなたがた(イスラエル民族)は、わたしのための、祭司たちの王国(a kingdom of priests)となり、聖なる国民となる。」この召しにイスラエル民族総体としては失敗したが、イスラエルの残れる者たち=レムナントはこの召しに応答した。
- ④ ユダヤ人信者たちは教会時代のレムナントであり、「王である祭司」に位置づけられる。イエスは「諸王の王、大祭司」。
- ⑤ この地位は、異邦人信者も受ける・・・後述の(3)

(2) 5節の「聖なる祭司」の箇所は、すべての信者が祭司であるという「万人祭司」の根拠として引用する論者もいるが、9節との文脈上、ここはユダヤ人が対象。

(3) 黙1:5~6、5:9~10では、異邦人信者もまた聖なる祭司となることがわかる。

(4) 適用

- ① ロマ12:1~2 供え物をささげるのは、祭司の役割

- ローマ人への手紙の主要テーマの一つは、「御霊に従って歩む」(8:4)
 - 自分の体を「聖なる、生ける供え物としてささげる」(12:1)とは、神のものとなった自分の体を動かして、神のことばに沿った生活を送ること(12:2)。これは、「御霊に従って歩む」ことの具体的説明。
 - 霊的な幼子が立ち上がり、歩み始めるときに、倒れる、転ぶのは、当然のこと。そのような失敗も繰り返しながら、成長していく。12:2の「心の一新によって自分を変えなさい(現在形)」は日々繰り返していくこと。
 - そのような信仰生活をするのが、新約時代の祭司の働きである。
- ② ピリ4:18 文脈上、パウロがここでいう「贈り物」とは、パウロの宣教活動のために彼に送られた献金のこと。この献金は「香ばしいかおり、神が喜んで受けてくださる供え物」である。よって宣教活動を経済的にサポートすることは信者がその祭司としての務めを果たすことになる。
- ③ IIテモ4:6 「私は今や注ぎの供え物となる。私が世を去る時が来た」 パウロは殉教の死が差し迫っていることを言っている。信者が信仰のゆえに死ぬとき、それは神の目には犠牲の供え物である。信者が祭司であることの最も端的な現れは、信者が信仰のために自分のいのちを取られることもいとわれないときである。
- ④ ヘブ13:15~16 祭司である信者は、常に神をたたえる賛美のいけにえを神にささげることが勧められている。また、善を行うこと、持ち物を分け合うことも、神に喜ばれるいけにえである。

15. 神の国に移された者である

- (1) IIペテ1:10~11 直訳「従って、むしろ、兄弟たち。勤勉でありなさい、確かなものとするように、あなたがたの召されたことと選ばれたことを。これらのことを行っていれば、あなたがたは決して倒れることはありません。それどころか、そのことは、あなたがたにとって、永遠の御国への入り口を豊かに飾ることになるでしょう。この御国は、私たちの主であり救い主であるイエス・キリストの御国です。」
- (2) この地位から派生する2つの実際的な展開
- ① コロ1:13 どこから神の国に移されたかという点、「暗やみの圧制から」である。暗やみの力は、もはや信者に対して拘束力を持っていない。
 - ② Iテサ2:12 神の御国に移っているという地位は、信者にとって、聖書が命じるような生き方を継続的かつ秩序的にしていくためのベースである。

16. 選ばれた種族、聖なる国民、神の所有とされた民【ユダヤ人信者にとって】

- (1) Iペテ2:9 ペテロの手紙は、ユダヤ人信者を対象としている。
- ① 選ばれた種族 (an elect race) 選びは神のみこころによる(イザヤ43:20)
 - ② 聖なる国民 (a holy nation)

- 出 19 : 6 イスラエルは、神から「聖なる国民」となるように召された。ヘブル語の「聖なる」とは「区別された」という意味。イスラエルは、出エジプトでひとつの国民となり、シナイ契約（モーセの律法）によって諸国民とは区別された。
 - ユダヤ人信者は、イスラエル民族総体から区別された「聖なる国民」。
- ③ 神の所有とされた民 (a people for possession)
- 申 7 : 6~7 イスラエルはエジプトから贖い出されて、神の宝の民となった (申 14 : 2、26 : 18)
 - イザ 43 : 21~22 わたしのために造ったこの民。しかし、あなたはわたしを呼び求めなかった。
 - マラキ 3 : 17 彼らはわたしのもものとなる→ロマ 11 : 25~29
- (2) 教会は、単数形の種族・国民・民で表現されるものではない。すべての民族、部族、言語、世界のすべての諸国民から構成される。
- (3) 民族としてのイスラエル総体は、出 19 章の召しに応答することによって失敗してきた。その中で、いつの時代にも、レムナント（イスラエルの残れる者）が信仰によって神の召しに応答してきた。教会時代のレムナントは、ユダヤ人信者である。よって、教会時代において「選ばれた種族、聖なる国民、神の所有とされた民」とは、教会に属するユダヤ人信者に与えられる地位である。
- (4) 適用 テトス 2 : 14 「良いわざに熱心なご自分の民を」→ 原語は「特別な民(単数形)」、ユダヤ人信者は「特別な民」という地位にあって、良いわざに熱心になることができる。良いわざを行うことで特別な民になるのではない。

17. 天の市民である

- (1) 信者の国籍は、天にある。
- ① ルカ 10 : 20 あなたがたの名が天に書き記されている
 - ② II コリ 5 : 1~2 天にある永遠の家
 - ③ エペ 2 : 19 神の家族
 - ④ ピリ 3 : 20 私たちの国籍は天にあります
 - ⑤ ヘブ 12 : 22~24 天にあるエルサレム・・・に近づいている
 - ⑥ I ペテ 2 : 11~12 旅人であり寄留者であるあなたがた
- (2) 適用 信者は、地上のことではなく、天のことをいつも気にかける。地上における信者は、巡礼者、外国人、居留者でしかなく、単に通りに過ぎていく者である。もちろん、この世でやらねばならないことについて信者は誠実に対応していくが、信者は自分が〇〇の国民であるという以上に、天の共同市民のひとりであることが重要であると、いつもわきまえている。

参考 : Ariel's Bible Commentary "Hebrews ~James~ I & II Peter ~Jude" P.342 -343